

モール型図書館の可能性に関する一考察：建築物の空間配列の観点から

米澤 誠

はじめに

2014年の改修工事により、大幅にラーニング commons 的なエリアを拡充した東北大学附属図書館本館は、アクティブラーニングを行うゾーンと静粛な学習を行うゾーンが隣接しているため、利用者が互いを目にしつつ行き来がしやすいという特性をもっている。多様な学習に関するアフォーダンスをもつこの図書館では、時間によって場所を変えつつ学ぶ利用者、学習中に知人と出会い話し込む利用者、友人に会うことに期待し

て滞在する利用者、参加したイベントに刺激され自分たちでイベントを企画する利用者などを、常に見ることができると期待するものである。

本論は、建築物としての空間配列という観点から、この図書館がもつ特性を分析し、理解しようと試みるものであり、この考察がまた、図書館のもつラーニング commons 的な機能を高める視点となることを期待するものである。

1. 図書館の空間配列

1.1 建築の空間配列とは

通常、建築物に関して考察する場合、その用途や使用機能の面からとらえて論じる場合が多い。例えば図書館に関してなら、どのような利用者を対象としてどのような資料を提供するのか、ラーニング commons 的な機能をもつのかどうかなどといった面から論じるのがその視点である。

一方、用途や使用機能から離れた物理的な側面、つまり空間における物理的な性格から建築空間を総体的に捉えるのが「空間配列」の概念であるといわれる。

図書館のような、一般住宅に比べて建物規模が大きく、内部に多くの部屋、それも比較的大規模な室（広室）を複数もつ建築物は、「室群建築」と呼ばれる。室群建築にもいくつかの種類があるが、多くの図書館は概ね、大きな広がりをもつ「広室建築」と、吹き抜けのような大空間をもつ「大空間建築」に分類することができる¹。(図1)

1.2 広室型の図書館

大多数の図書館は、閲覧室や書庫といったいくつか

の広室から構成されている広室型図書館である。規模にもよるが、多くは複数の階層からなり、層毎に異なる用途や使用機能をもつ。例えば、東北大学附属図書館本館2号館はこの広室型図書館であり、1階には閲覧席と和雑誌、2階から3階には和雑誌・洋雑誌、4階には古典籍と貴重図書を配置している。(図2)

著名な公共図書館で言えば、せんだいメディアテークなどもこのタイプで、3～4階は市民図書館となっているが、1階はオープンスペース、2階はメディアテーク、5～7階は展示・イベント・スタジオスペースなどとなっている。

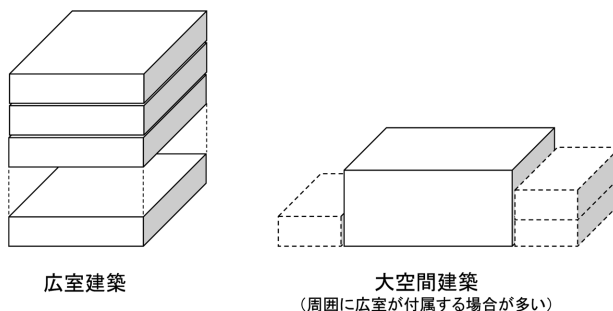


図1 室群建築の種類

1 日本建築学会、『建築設計資料集成 総合編』、丸善、2001年

近年、大学図書館内もしくは大学図書館に隣接してラーニングコモンズを設置する場合は、せんだいメディアテークと同様に、従来型の図書館機能部分とラーニングコモンズ機能部分を別階層にするケースが多くなってきている。この機能を階層別に行うゾーニングは、スタッキングという。

1.3 大空間型の図書館

これに対して複数の階層を貫くスペースを中心にもつ図書館、もしくは全体が単一のスペースである図書館は、大空間型の図書館と特徴づけられる。例えば、東北大学附属図書館本館1号館はこの大空間型図書館であり、1階の中央にはメインフロア、それを取り巻く1階もしくは2階部分に隣接して学生閲覧室とグローバル学習室など、そして地下には書庫を配置している。

(図2～4)

この種の大空間型図書館としては、武蔵野美術大学図書館、岐阜市立中央図書館(ぎふメディアコスモス)などがある。武蔵野美術大学図書館は、1階エントランスから階段を通じて2階学習フロアまでは一体化した空間となっており、各種資料と閲覧席が円環状に配置されるという、極めてユニークなレイアウトとなっている。また岐阜市立中央図書館は、岐阜市の文化複合施設「みんなの森」の2階全体に位置しており、児童エリア・ヤングアダルトエリアと一般エリアを明確に仕切ることなく、オープンなワンフロア構成となっていることが特色である。(図5～7) ちなみに、同一フロア内で仕切りゾーニングすることを、ブロッキングという。

2. 商業施設にみる空間配列の特性

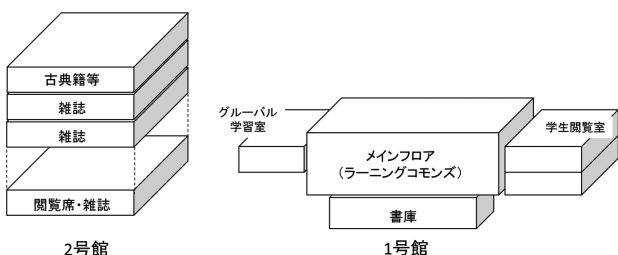


図2 東北大学附属図書館本館の配置

2.1 広室型としての百貨店

図書館のほかで広室建築として代表的なものには、百貨店、美術館、庁舎・事務所などがある。多くの顧客が訪れ、多彩な商品を提供する機能をもつという点において、図書館との類似性が多い商業施設の百貨店を例に、この広室型の特色を確認してみると次のよう



図3 本館パノラマ写真(1)



図4 本館パノラマ写真(2)

になる。

まず、全体として積層型のフロアで構成されており、フロア毎のサービスコンセプトが考えられている。各フロアで機能がほぼ完結しており、フロア間の区切りが明確である。特に高層の場合、フロア間の主な移動手段はエレベーターであり、移動は断続的、目的とするフロアの機能を意識して直線的に移動する²。

三越・高島屋・西武など伝統的な百貨店の多くは、このような性格をもっているが、近年の東京ソラマチや渋谷ヒカリエなども、このタイプの空間配列を踏襲している。

2.2 大空間型としてのショッピングモール

百貨店と対比される商業施設としてのショッピングモールは、大空間建築としての性格をもっているといえる。ショッピングモールを例に、大空間型の特色を確認してみると次のようになる。

まず、全体として平面的な展開の連続エリアで構成されており、フロアという概念が希薄である。エリア毎に機能はあるが連続しており、区切りは広室型ほど明確ではない。階層的なフロアがあったとしても、主な移動手段はエスカレーターで移動は連続的であり、それがためにフロア概念が無効化されており、フロアの機能をあまり意識することなくモール内を回遊する。

博多のキャナルシティや台場のヴィーナスフォート、舞浜のイクスピアリなどはこのタイプの空間配列であり、ディズニーランドもこのタイプの典型であるといえる。

2.3 空間配列の特性

百貨店とショッピングモールという商業施設を例に、それぞれの空間配列の特色をみてきたが、それらに対比しつつそれぞれの特性をまとめると、次のようになる。

表1 百貨店とショッピングモールの特性

百貨店=広室型	ショッピングモール=大空間型
垂直的な積み重なり（積層的）	平面的な展開（平面的）
フロア毎にコンセプトが明確（局所的）	フロアという概念が希薄（連続的）
フロア毎の区切りが明確（区別的）	全体として区切りが不明確（俯瞰的）
移動はエレベーター（断続的）	移動はエスカレーター（交流的）
目標を意識して直線的に移動（固定的）	目標をあまり意識せずに回遊（回遊的）

この空間配列の考察から得られた広室型建築の特性を「百貨店型」、大空間型建築の特性を「モール型」と名付けて、次章では図書館建築におけるモール型の可能性について論ずることとしたい。



図6 同・仕切りのないフロア

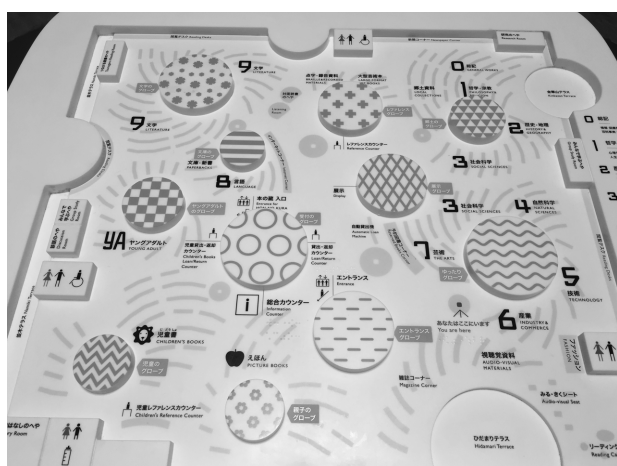


図5 岐阜市立中央図書館・フロアマップ



図7 同・仕切られてない児童ゾーン

2 東浩紀，大山顕，『ショッピングモールから考える』（幻冬舎新書 403），幻冬舎，2016年

3. モール型図書館の可能性

3.1 図書館における空間配列の特色

百貨店型とモール型の特性を、それぞれの空間配置をもつ図書館に適用して特色を比較すると、次のようになる。

表2 百貨店型図書館とモール型図書館の特色

百貨店型図書館	モール型図書館
垂直的な積み重なり(積層的)	平面的な展開(平面的)
明確な機能別ゾーニング(局所的)	ゆるやかな機能別ゾーニング(連続的)
階層分けされたフロア(区別的)	全体が見渡せるフロア(俯瞰的)
目的のフロアのみ利用(断続的)	気分に応じた場所の利用(交流的)
直線的・ピンポイントな移動(固定的)	冗長的な移動(回遊的)

百貨店型に比べたモール型図書館の大きな特色は、大空間を中心とした館内にある各ゾーンを見渡すことができ(平面的・俯瞰的)、それぞれのゾーンの利用者の学習活動が目にとまり(俯瞰的・交流的)、たやすく他のゾーンに移動できることであろう(連続的・回遊的)。モール型に比べると百貨店型の図書館は、全体を見渡しにくく、他の学習活動は見えにくく、他のゾーンへは移動しにくいということになる。

近年、多くの大学図書館では、アクティブラーニングの場所としてのラーニングコモンズを図書館内に設置しているが、多くの図書館は百貨店型であり、ラーニングコモンズはゾーニングされた特定のフロアに置かれることが多い。この場合、従来型の静謐な学習室とラーニングコモンズは明確に区切られ、静謐な学習者とアクティブな学習者はそれぞれの学習活動を見ることが少なく、他方への移動はしにくい。図書館が備えている各種の機能が、フロア毎に閉ざされた図書館ということが出来る。

一方、モール型の図書館の場合、静かな学習室とラー

ニングコモンズ的なエリアは連続して見渡せ、それぞれの学習活動の様子も常時目に見える。また、必要性和気分に応じて気軽に他方のエリアに移動して、違う学習活動を続けることが容易となるのである。図書館が備えているさまざまな機能が、全体に対して開かれた図書館と性格付けできるのである。

3.2 モール型図書館の可能性

このようにそれぞれの特性を対比すると、百貨店型の図書館は、学習活動が従来型の静謐な学習だけで均質である限りは有効であるが、それとは異質のアクティブラーニングも促進し、学習者が臨機応変に学習活動を変えるにはあまり適していない。図書館の書物から一人で情報を得て、一人で図書館の外の社会へと帰っていく場合には向いているが、人々が集まり交流して知を創り出すには、不向きなのである³。

一方モール型の図書館は、学習者が学習活動を変えながら、長時間過ごすには最適であることが分かる。また、単独での学習やグループでの学習のみならず、他者との待ち合わせや出会いの機会が多いことから、魅力のある交流の場となる可能性を高めるものといえる。

筆者がモール型図書館の典型と考えている岐阜市立中央図書館は、設計者の建築家・伊東豊雄氏によると、「訪れた人が自由に場所を選んで振る舞える、まるでひとつの街のように開かれた建築」を目指したものであるという⁴。この開かれた図書館こそ、知的交流を促進し相互に影響を与え合い、学習活動の拡大や深化を促す場になるものと考えている。

さいごに

以上、改修工事を機に着目し始めた図書館の空間配列の特性分析から、学習活動の相互交流や知的誘発性の高いモール型図書館の可能性についての考察を行ってきた。しかしこの考察は、百貨店型図書館がその可能性を持つことを一概に否定するものではない。

百貨店型図書館の場合でも、フロア内にモール型の要素を取り入れたり、フロア間の交流性を高めたりすることで、モール型図書館に近い性格づけをすることができると考えている。例えば、武蔵野プレイスなどはその好例で、一つの建物の中に図書館機能のみなら

3 岡本真, 森旭彦, 『未来の図書館, はじめませんか?』, 青弓社, 2014年

4 伊東豊雄, 『「建築」で日本を変える』(集英社新書 0848F), 集英社, 2016年

5 猪谷千香, 『つながる図書館』(ちくま新書 1051), 筑摩書房, 2014年

ず生涯学習支援や青少年活動支援，市民活動支援などの機能も併せもち，快適で居心地のよい図書館として成功している⁵。その図書館のもつ空間配列を十分認識した上で，その用途や使用機能をさらに高めることは，工夫次第なのである。

(よねざわ まこと，事務部長)